江柱概観

江柱町の由来

江柱概観
道祖神信仰
庚申信仰
江柱の六地蔵面金剛
藤づる名号碑
貫山句碑
若宮八幡宮略記

江柱概観

資料提供／江柱連合自治会／顧問/中曽久吉　Hisakiti Nakaso
作成／2023年（令和5年）1月15日
編集/桧物和広　Kazuhiro Himono/e:mail himokazu@nifty.com

江柱概観

藩政期の二百四十年間、放生津町は小杉の郡奉行所の支配をうけた。東西の磯づたいに長い町並から南へ伸びるために放生津橋（古橋、東橋、山王橋）が内川に架けられたのは慶長（一五九六～）の初めであった。この橋の南に堅に立町の家並が貞享（一六九四～）ころからみえる。田圃の中の（端の）長蒲寺（天啓山）が立町の南に慶長十九年（一六一四）藩の大家老奥村栄明の妻女要泰院（亀子）の菩提所として守山にあった旧長慶寺を再興された。ここは、まだ空地が多く不便な藪沢の湿地であったが文久元年（一八七五）ころ西神楽川出水後の改修工事で川を直川に滞水地帯を整地して明治八年（一八七五）東辺（放生津区）を放生津大字江柱と命名した。（別紙江柱付近図）

中世の南北朝時代、南朝に加担した姫野一族は、宗良親王隠匿のため北朝の忌意に触れ領地没収、それを石清水八幡宮へ寄進された。

応安五年（一三七二）十一月二十二日

奉寄　石清水八幡宮　越中国　姫野一族跡事

左馬頭　源朝臣義満

この地に鎮まる「宇の宮」（宇佐八幡社・若宮八幡社）は、江柱の鎮守で、付近に八幡田があった。姫野一族の持宮時代から時移り放生津区会の管理となり、さらに大正二年九月二十四日県社放生津八幡宮に合祀され、社地は消防の功労者木林五郎兵衛の顕彰地となり戦後は江柱公民館と駐車場に変わった。

大正九年、放生津区会議員に選出された故卯尾田毅太郎（のちに、新湊町長・富山県議会議員・衆議院議員）が、江柱田地の宅地化を図り道路を整備したので、これに沿って建売住宅が建築され大正末期から昭和七・八年頃までの十余年間に江柱の新住宅街の誕生をみた。

大正十年に二の丸小学校が創設され、越中製軸株式会社が始動し、西神楽川から荒屋・越の潟田圃への灌漑用水供給の大樋が内川に架けられ、これに沿って二の丸橋が架設された。又同十三年新湊立憲青年党会館が江戸相撲や草競馬の行われた広場の西辺に建設され、ときの内務大臣安達謙蔵が来館して記念講

一

江柱町

１）江柱町の命名　　（新湊市史　　Ｐ４５５より）

◎明治８年（１８７５）　放生津大字江柱と命名する。

Ⅰ）西神楽川の溢水

西神楽川の溢水は、たびたび放生津町の南部や四日曽根に溜まって洪水を起こし、また法土寺にも溢れた。米作に被害をうけたことがおおく、排水についての流路の改修などの騒動は西神楽川の排水問題とも絡んでなかなか深刻であった。

Ⅱ）西神楽川の溢水の原因

もともと西神楽川の吐水は、長朔寺裏地で左折して立町を横切り、東流して、法土寺川となって内川（放生津川）に注いでいた。この左折地点より小川が北流して内川に吐水したが、この川に架橋された紺屋町－新町の堺橋（西神楽橋）が橋の長さ３尺７分　川幅２間２分に限定されたことが原因。（字内川旧記）

これは、放生津潟に吐水する鍛冶川、大坪川、東神楽川などを用水とした上手の村々の主張によったもので、藩が既にこのように裁許したものであった。

（柴屋文書）

Ⅲ）西神楽川の直川と滞水地帯の整地

放生津町や四日曽根、朴木、中曽根の村々などでは直川にして吐水する流路を願い出たが　潟内川を擁する村々の反対が強くてなかなか実現しなかった。

（久々江屋旧記）

もともと、この西神楽川の曲折点の地所（１２９歩）は放生津町方が管理した放生津領であった。ここが八幡田という故名をもって呼ぶ大字で、のちには獅子絵田の名でよばれるところであった。

（獅子絵田由来記）

この西隣が四日曽根の飛瀬町割でこれに低くつづいてあり、こう地帯は飛領の「草壇場」とも総称され、この高畦に作った畑地のところに出作人らが納屋を建てており、「ハサ掛け場」もあって、この屈曲のところに流量調節の排水門を設けていた。　　（四日曽根諏訪社由緒書）

西神楽川の排水調節と直川改修への努力は、ここの整地の焦点に集まったが、のち幕末の文久元年（１８６１）のころ出水による後の改修工事に西神楽川に直川にして滞水地帯を整地した。

演が行われた。

昭和十二年に日華事変勃発、高周波鋼業株式会社が荒屋田圃に進出したころ、江柱は周囲の町々と連なる町づくりがほぼ完成した。

道祖神信仰

江柱の鎮守神、大鷦鷯（仁徳天皇）を祭神とする若宮八幡宮については、「こども神輿」の所で述べることにして、此処では江柱の民俗信仰について俗称「庚申さん」の傍らにある石像の概要を記します。

道祖神信仰は、日本の古い民俗信仰の一っで一般には道路の分岐点または町村の入口にあって、その町村・道路に悪いものが（邪神）入って来ないよう防ぎ守る神のことで、『古事記』には岐神、布那斗能加微、塞坐黄泉戸大神『和名鈔』には道祖神、佐倍乃加美『日本書紀』には来名戸之祖神ともある。中世、中国の道祖神の信仰が流入され、愈々盛んとなる。近世に入って、男女一対の像を石に刻んで祭ることも行われ、そのため古来の道路安全、村内安全の神から男女良縁の神、妊娠、出産、幼児守護の神にまで発展して信仰された。江柱の石像は、道祖神と字を刻んだものである。

古来わが国では猿田彦神（日本書紀）猿田毘古神（古事記）大士神（神代系図）とも言われたので信仰としては郷道神として人々に幸福を与える神ともされた。猿田彦神とされてからは道祖神の石像にも三猿（不見、不聞、不言）の像を刻んだものも現われている。なお、仏教信仰と習合すると、道祖神の本地が地蔵菩薩とされるところもある。大方は広場にあって、一月十四日の左義長を道祖神前で行うところもある。

ここで、放生津八幡宮、日吉神社、東町神明宮、気比住吉神社などに祀る来名戸神についてふれてみたい。

『日本書紀』にある岐神の本号は来名戸之祖神であり『古事記』では衝立船戸神『延喜式』では久那止と御名を申すとあります。

来名戸神は、伊弉諾尊が黄泉之国より還りましし時、八色の雷等追い来たりしに、つかせ給いし杖を投げ給いて、これより以遠に来まじと宣給いき、その杖に成りませる神なり。船戸、

（久那止、経勿所、来勿所）は、これより先は来る勿れの意なり。

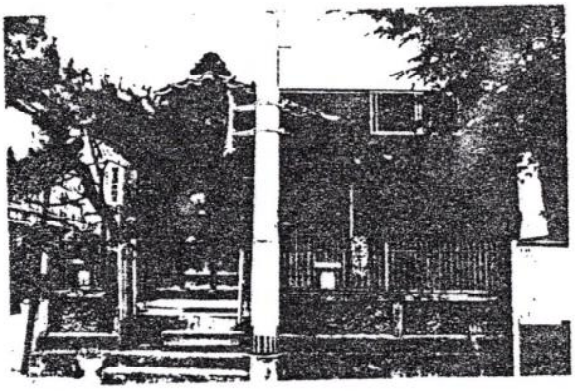
毎年六月、十二月に朝廷に於て行われる道鎮祭に八衢比古八衢比売の二神と共に祈られ邪神もし外より来たらば、この三柱の神衢路に大磐石の如く立ち塞がり日夜守らせ給へと祈り申さるなり。来名戸之祖神と申すは即ち、来莫門之塞神と言う意なり、塞に祖の字を書けるは、中国では行道を祖神と言うので、その意を得て書かれたるなり。

八衢比古、八衢比売は『古事記』には道俣神とあり久那斗神（来名戸神）と共に衢路に大磐石の如くに塞りまして邪神のもし外より来たりせは、これを防ぎ守り給う神にまします

（神社祭神御事歴）

庚申信仰

庚申信仰は道教に由来するといわれる。後漢の末頃（二世紀）道士張陵が開祖で福・禄・寿の現世的な幸福に主眼を置くもので、中国では根強い信仰になっている。道教の教典である『太上感応篇』に、人の罪過を司る神があって、常に監視を怠らず、長生きを求めようとするものは、常に邪悪を避け行いを正せよと教えているが、その初め人身の内に三尸神、または三尸虫なるものがいて庚申の夜ごとに昇天して人の罪過を天帝に報告すると記している。また三尸は上尸は色欲、中尸は愛欲、下尸は貪欲とも説明され、それを慎むことが福・禄寿を得る



道とされている。それが庚申の夜、人の睡りに乗じて天に昇り天帝にその人の罪過を告げる故、眠らずにこれを守り夜半南に向って彭侯子、彭常子、命児子と三度ずつ唱えて祭れと教えてある。庚申信仰は、最初、皇極天皇の御宇に中国から伝えられたが、女帝の故に、この式を行われず天智天皇の御宇に始めて庚申儀式が修せられ、後に文武天皇の大宝元年（七〇一）正月

の日に生れることもあり得る。それでは、その子が可哀相である。そこで庚申の日に生れた子に『金』の字を入れた名前をつけると盗人にならず長生きすると言われるようになった一種の救済手段である。

以上庚申信仰について触れてみたが、日本には平安時代に伝えられ、もとは皇室貴族の間で行われ、さらには武家へ、江戸期には一般庶民の間に流布し、明治以降も庚申講として残ったのである。この日は夕方から宿って簡易な勤行をなしみんなで飲食を共にしながら夜を明かした。長い夜の退屈しのぎに連歌、俳句、舞句などの文芸から囲碁、将棋、踊り等の遊びごとが出されるようになった。宮中でも白粥、赤粥、江戸期には小豆粥などの夜食があったと言われる。娯楽の少なかった時代の町村では、宗教行事に結びつけ飲食騒ぎを楽しみとした。

今世紀になると、諸々の欲望を断ち、肉食を戒め、沐浴潔斎、端坐して寝ずに夜を明かし善行をつむように奨励されたこれは三尸は悪過のみならず、善行も天帝に報告するという説が生れたからである。また、庚申には七種以上の供物をするところから、一枚の畑にいろんな作物を混作することを、『庚申畑』と呼んでいるのも面白い。

藤づるの名号碑

浄土宗光蓮社超誉道誉西堂義歓の墓碑ともいわれる六字名号（南無阿弥陀佛）石碑の前に五輪塔を置く藤づるの名号は義歓を化導した義賢行者の筆という。次に、かかわり深い新潟市八幡町弐丁目の浄土宗、吟松山光山寺大仏南興略縁由を記す。

夫れ、ものに興廃あり、その廃れたるを興さんとするに十の中一をなすこと稀なり、爰(ここ)に上品の阿弥陀仏丈六の尊像は往昔天和弐年（一六八二）に建立し、加州金沢妙慶寺の別堂に安置し奉り常行念仏の本尊たりしが、いつの頃よりか中絶し、本尊は遠地ここへ伝誦に相成る。火災にあい給いて（弘化二年二月十四日放生津大火）後光、蓮台を焼失し給う。尊像も正に廃亡し給はんとしたるを、①光導行者悲観して再興を勧められたるは越中放生津の住②清水屋喜助の舎弟なり壮年の時、義賢行者の化導により世を遁るるの志し深しと言へ共、其、両親出家を

許さず母の没後、弘化元年（一八四四）信州善光寺に詣て直に武陽鴻巣の勝願寺へおもむき得度を願願しけれは御当職願のし旨御許容ありて法号を義歓と御授けありければ、年来の宿願を遂げしことを厚く喜びて帰国して旧里に近き③姫野と申す所に草庵を結び怠たらず勇進禅名して年をぞ送りけるにかたぶく南興の事を同所④放生山当住察浄和尚⑤吟松山当住龍興和尚このしきりの勧めにより有信の人と志を合せ光山寺境内に土蔵造りの一宇を新建し、尊体を補修し後光蓮台をつくろい常行念仏を修せんと志願して安置し奉るなり、後光中へ十二光仏並びに九品の弥陀仏を安置し奉らんとて皇都に登りて件の仏を仏師山本茂補に彫刻せしめ、貫主大僧正に開眼を願ことよしを申し上げれば善哉大善事利益無窮ならんと御随喜一方ならず開眼法式とり行い、且つ法王殿の額字御染筆ありて御授与し給へり、実に善を見てひとしからんことを思はずんばあるべからず。別して同国の好身なれば当法主尊前御方初め奉り小弟等別慶寺大楽寺地家の産にて殊さらに親まれて随喜のあまりこのあらましを志るすものなり。

（一八五六）

安政三とせといふ九月

総本山知恩院第七十一世

⑥ 萬誉大僧正御代内幹夏

賓　道　花押

吟松山光山寺第十四世

廣誉賓道　謹写

注記

① 光導行者とは念仏行者のこと

② 清水屋は、二ノ丸町　真野家の屋号

③ 姫野は、大西家付近

④ 放生山当住察浄和尚は、放生山曼陀羅寺二十八世
　専蓮社真誉上人立阿一根察浄大和尚で三十世に再任
　明治五年十月没

⑤ 吟松山当住龍興和尚は、吟松山光山寺十世龍興大和尚

⑥ 萬誉大僧正は荒屋村　米田家の出

貫山句碑

餅屋勇蔵（富士井勇蔵）　俳号　貫山

「巳之中葉」にみえる貫山は、「奥の細道」の『早稲の香や……』（放生津八幡宮）の建碑者、子遺と共に近世放生津俳壇の中心であった。句碑は、放生津社中の同人によるもので、

『青柳や　下ほう虫の　とりすがり』である。

安政六年巳末　八尾町、西町曳山の長押等を作る。彫金は八尾町曳山金具の呼物で、勇蔵は有名な刀の目貫師でもあり富山の鉄細工の名人、明珍と共に世その名が高いと記している。

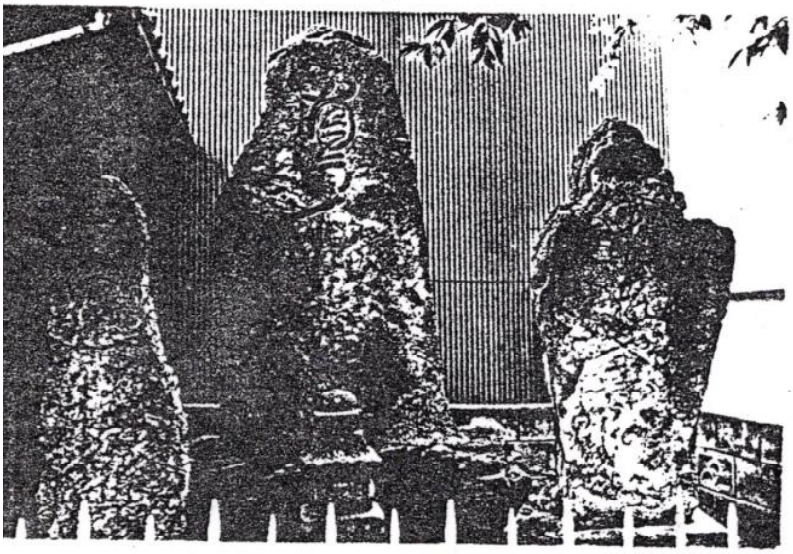
（八尾曳山）

結　び

江柱は、小杉に通ずる七曲街道の放生津外れであり、道と町の守護には、道祖神、庚申の民俗信仰の篤い町であろう。

浜中に建立された庚申堂を三十年も経ない内にこの地に移す程強い願いが、これを証するようである。

庚申堂に習合するかのように道祖神が並び、次に浄土宗の行者義賢大和尚の藤づる六字御名号が建ち、一番北側に近世放生津俳壇の中心であった、餅　貫山の句碑が並び、信仰と文芸が町の守護神仏のように、集められた聖地であり心のよりどころとしての重要な場であろう。



貫山句碑

藤づる六字名号

道祖神

旧宇の宮

若宮八幡宮略記

も　と　若宮八幡宮
（宇佐八幡宮の「宇」の一字を冠して「宇の宮」ともいう）

鎮座地　新湊町大字放生津町字江柱二百七十二番地

祭神　仁徳天皇（またの名大鷦鷯尊（おほさざき））

勧請年月日　万治元年（一六五八）六月十二日
（説話あり御神体は八幡田より出現されたという）

社地段別　七畝二十三歩

信徒戸数　二、四六九戸

明治三十三年放生津八幡宮蔵米社
歩数、各氏子戸数表より

一、奉　　祀

応神天皇を八幡宮と称して斎き祀るに対し仁徳天皇はその御子にましますに
よりて若宮八幡宮と称するなり

二、八幡宮の神使は鳩なり

放生津小学校校歌にも御神徳のこころ見ゆ

三、合　　祀

大正二年九月二十四日　放生津八幡宮に合祀

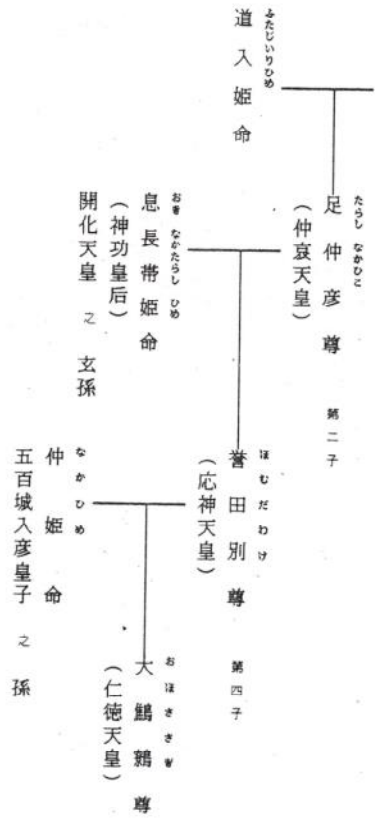
四、神　　紋

菊花・桐葉の抱き合せ紋なり

菊　皇室のシンボル

桐　高貴麗花にして木には鳳凰が宿るという聖王を意味す

御神系



一、田の虫送り　放生津区会で例年施行されたという

二、秋　祭　宝暦六年（一七五六）三月　天啓山　長朔寺　旧記より

前　略

九月中

六日　ハ　姫野仁兵衛持宮　之　祭也

五日　之　早朝迄　ニ　家来　ヲ　遣　シ　宮前弟一　之　事

村　之　内　モ　奇麗　ニ　掃除可申　ニ　存候事

必　ス　失念　スヘカラサル　事

後　略

町内安全鎮火祈願祭について

江橋町連合自治会

顧問　中曽久吉

もともと西神楽川の吐水は長翔寺裏地で右折して立町現立町交叉点を横切り東流して法土寺川となり内川（現放生津橋付近）に注いでいた。この右折付近より小川が北流し内川（現ラーメンドゴ天かす橋）に吐水したが、増水の時や豪雨の時等にはしばしば洪水となった。事態解消の為、西神楽川の直川改修が行われ明治八年に完成この接地の東辺（放生津橋）を大字の江橋に、西辺を獅子塚田と命名した。（新橋市誌）当時放生津の雑子言葉に（土地造りの大工事）田んぼの中の長翔寺（もちろん）隠れ（ます）様に切り開き長翔寺周辺は田ぼで有名な納屋が点在する程度であります。明治末期から大正初期にかけ神楽川添いに十数軒、長翔寺周辺に十軒余りの集落が見られる様になりました。大正四年新湊警察署が長翔寺向いの現新湊信用金庫北側隣東海に東町支署

明治十四年十二月　高岡警察署放生津分署東町に設置

明治三十六年十二月　高岡警察署昇格

新築移転されました。爾来、加速的に住宅が殖えて行きました。
今は昔、一古老の語ります俺が丘陵（現後）から帰ったら三年
の内（大正十三年～十五年）に家数が三百軒余りなっていた。又
昭和七年には越中鉄道（現万葉線の一部）が敷く度に道
前通り（昭和八年）には当時の国鉄新湊駅（現六渡寺駅）近
南通中新湊駅が新築され駅周辺からは、富山行き、高岡行き
のベスの運行、拠点ともなりその頃より飛躍的に活発な
の発展が見られ家数も三百軒近くなり日に日に活気づ
いて行きます。

秋葉三尺坊大権現

当町内には天然山長翁寺があります。寺には曹洞宗の
末寺等の他に秋葉大権現の三尺坊がおまつりしてあります。37年に
なりますと当町のみならず、付近有縁の二、三の町内も依
頼大祭りと称し町内子金張大祈願祭を行ってお
れる様ります。れ利益が有ると言いますが、不思議と長翁寺
周辺半径一km程度の範囲にはこの百年余りに渡り

2

被災十軒許りの大災は有っても大火と言われる一百軒
或百軒にのぼる火災は有りません。
当町内の類火祈願祭は何時頃から行われたのか定
はありません、その迹の町勢記でも見られる様に長朝寺の
一史は古いのですが町の一史は未だ浅いのです。
依補町類火祈願祭といっても別に左仮長の
様に火を焚して祈願する訳でなく長朝寺由の秋葉
大權現の前で長朝寺方丈による大般若経の読経と
祈願文が読み上げられます。何せ昔から怖いものの例に
地震、雷、火事、親父とあり、どう合せ火災になる事命
或者の危険が伴いますので各家庭からは八、九割の
方々がおまいりになります。
初め明治末期から大正初期にかけ長朝寺周辺の人も
有志の方々が行っていた火防の行事も新興駅舎
中新興駅舎が新築され、飛躍的に家数がふえるに

4

つれ、何時しか町内挙げての行事になって行きました。
私が子供の頃（昭和七、八年頃）夜ともなれば聞えるものは
人のまく足音と話聲だけ、二月七日雪でも降ろうなら
足音も聞えませんでした。今晩長朝寺で火祭やから行って
来ると云かけます、七時過ぎには初勤めの太鼓の音が
私の家にも聞えました。かれを聞いて火祭りが始まった
ぞと云います、翌朝目がさめますと、枕許に玩具の刀が
置いてあります。今年は遅かったから昨夜の火祭に刀
がなったぞと父の聲、そんな思出が有ります。
戦時中の隣保班が自治会組織に変った今日でも町
内活動の一環として非常に続けたいものですね。
年の始めに当り心新たに、家内や町内の安全を願い
併せて挙町一致町の発展を願うのもうるわしい行
事ではないでしょうか、福引による遠足なども自治会による
親睦の中に語り合い町内の将来像、いつまでも続けて
欲しいものですね。

平成十三年二月四日

欲しいものですね

おらっちゃの町の曳山

古新町

王様・諸葛亮の由来

昭和二十一年発行かわら版より抜粋

支那三国の名将、字は孔明。漢の司隷校尉諸葛豊の後、初め隆中に隠れて躬ら隴畝に畊し好んで梁父の吟をなした。蜀漢先主劉備其の名を聞き三顧の禮を採るに及び其の知遇に感じ天下三分の策を述べ先主を佐けて荊州を取り益州を定め遂に魏呉と鼎立の勢力をなした先主即位するや丞相となり其の歿するに及び遺詔を承けて後主劉禪を補翼し武郷侯に封ぜられた。管制を整え法度を修め北魏を討って中原を回復し漢室を復興するを其の志とし、東は呉の孫權と和し南は雲南ほ征して背後の憂なかりしめ西紀二七二年出師の表を奉って北伐し魏と相攻戦すること数年遂に病を得て五杖原の軍中に歿した。(西暦二三四年忠武と謚せられた。

三日曽根

先代から現在それから未来へ

我が町の曳山は享保六年(一七二一)創設以来現在に至る二百八十年を経て、当初は田町の山と呼ばれ、それから出町の山と名が変わり、明治二十八年からは現在の三日曽根曳山と正式名称となり、年月を経て明治四十五年二月二十六日の三日曽根大火(俗称出町の火事)に類焼となりしも、王様(布袋様)と衣装及び標旗の標識がからくも難を逃れ現在に受け継がれています。

昭和二十四年に町民の敬神崇祖の篤い思いにて再建され、当初は中山、高山も骨組みだけの簡素な曳山であったと聞かされ、再建当時の写真も公民館にて見ることが出来、昔を偲ばせております。それから毎年毎年、町民の情熱と固い意志にて支えられ約十年の年月をかけ現在にみる曳山に完成したと聞き、現代に換算すれば莫大な金額になるにもかかわらず、町民の曳山に対する意気込みは大変なものであったであろうと想像しながら、中山の四隅に吊り下げられている岐阜提灯にも見られるように波が描かれ、絶対に火事に遭わないようにと願いを込め延々と受け継がれ現在に至っており、大事な曳山を後世に伝えていくためには色々な諸問題が山積するも、町民の一致団結と愛着を持って我が町の誇りとし、後世未来に伝承させていきたいと切に思います。

立町

立川志の輔さんに曳山についての思いを書いて頂いたのでご紹介します。

どこにいても、この日は「イヤサー」

立川志の輔

十月一日。

この日ほど落語会のスケジュールが入っていることを、恨めしく思う日はない。

新湊を離れて、かれこれ三十年になろうとしている。その間、一度も「曳山」を見ることができないでいる。

でもこんなに長い間見ていないのに、十月一日になると毎年鮮明に記憶がよみがえる。

祭りの日に着るために買ってもらった真新しいズボンを枕元に置いて、ワクワクして眠れなかった前の日。

快晴の朝、家々の玄関に吊られている、家紋の入った幕が醸し出すおごそかな空気。

何処からともなく聞こえてくるお囃子に浮き立つ体。にぎりしめた百円玉。

大勢の友と行った、八幡様の境内の「あんばやし(コンニャクの田楽)」の香ばしいニオイ。

我が家の食卓にある、お重の中に詰められた「べっこう(卵の入った寒天)」のやわらかさ。

うちの前を通る曳山を見ながら、一度でいいからあの上で、ハタキを振ってみたいと、真似をしてみた鏡。子供だったのに涙が出るほどロマンチックだと思った「提灯曳山」。

そして祭りの後の、なんとも言えない淋しさ。何もかもを覚えている。

それほど私にとって特別な日十月一日。

だから毎年この日は、たとえ日本のどこで仕事をしていようとも、私の耳には「イヤサー、イヤサー」の掛け声が一日中聞こえているのです。

新町

曳山の幕及び幕押えの事

幕は昭和八年に新調されました。金糸銀糸の総縫い潰しで完成され、当時の金七百円を要し、出来栄えの立派なのには皆々驚嘆したと伝えられています。絵画は皇后に因んで縁は金の鮎、前は日乃出、横は鹿、後ろは雉で他に類例のない壮大な構図であります。皇后が鮎を釣って戦勝を占ったから、それまでは鮒と書いたが、後に鮎と書くようになりました。しかし大変な手違いで寸法を間違い、在来の幕より五寸程巾が広いものとなり、窮余の一策として中柱を五寸程度長い物と取り替え、山車自体も前より五寸程伸ばす事になりました。いつの機会にか元の通りにしなければ均整が取れていないと言う事で、名工の作に汚点を残しているのです。(古い中柱は山車倉に残存しています)　次に幕押え金具には昆虫が主として製作されており、蜻蛉、蟷螂、蜂、蝉は勿論、蜘蛛、他には酸漿等があります。特に大きな珊瑚を用いている事に目を見張るものがあります。

現在の長手及び車は二代目で有り、一代目の時より大きくなりました。

二代目の車は欅の一枚板で作ってあり、四枚一組を僅か八十円で伏木本町に売却したのです。昨今では嘘のような話です。さらに高岡市小馬出町の山車と新町の山車の幕押さえは丈や巾、金具の彫刻とその図柄も寸分違わないとの文献もあります。

私は名工による技物を子や孫に残して行くと言う重い責任と共に、曳山車の研究をする時は、高岡、新湊、伏木、石動、氷見等を比べてみる必要を痛感します。

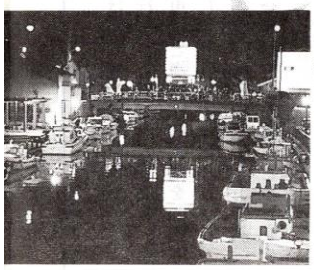
紺屋町

小さな町の大きな意気込み

紺屋町は家数わずか二十軒の小さな町。我が町に代々引き継がれているのが、王様日本武尊ダシに剣太鼓を戴いた曳山である。過去に数年参加を見合わせたが、「多くの人に見てもらう事」こそが先代の意を受け継ぐことと、協力者と住民一同頑張っています。祭礼当日は「小さな町の大きな意気込み」も併せてご覧下さい。

南立町

当町内の町建てが嘉永元年(一八四八)頃であるから、市内では遅い方であった。当時は曳山を持つ他町内がうらやましく、「おらが町にも……」と町民の熱意が結集し、文久二年



ご協賛いただいた方々(敬称略・順不同)

東新町曳山委員会
西新町曳山委員会

高市
新湊市本町二丁目八番十二号
☎〇七六六(八二)〇二五四六

やき肉・すき焼き
濠洲
新湊市役所前駅南
☎〇七六六(八二)〇二八八三

北日本新聞
新湊東部販売店
立浪譲二
新湊市立町一八番二三
☎〇七六六(八二)〇五〇四二

八幡園
新湊市八幡町三番二二七
自宅　〇七六六(八二)〇二九六三
農場　〇七六六(八六)〇二六二五

新湊土石有限会社
代表取締役　東保昭夫
新湊市本町二丁目十四番十六号
☎〇七六六(八四)八七一二

プロパン、オートガススタンド
(有)加治商店
加治定弘・加治定俊
立町(日法寺)(八四)六五〇〇

各種仏壇・仏具・建築うるし
桧物塗物店
新湊市立町一二番一五号
☎〇七六六(八四)八一五〇

奈呉町曳山委員会

アミヤ写真館
新湊市立町一一番四三号
☎〇七六六(八二)二三三七

古新町曳山委員会
古新町連合自治会

（一八六二）曳山の建造に着手し、明治十四年九月に「シンミチの山」として完成された。

当町内の世帯数も六十数世帯になり、人的な面又維持などの面で大変な苦労もありますが、今後とも町民一丸となって守り続けていきたいと思っています。

今年は新湊市市制五十周年の行事として海老江曳山と合同巡行計画されています。又前夜祭としても巡行が計画され、当町内の曳山も参加を予定しており祭り当日をより一層盛り上げて行きたいと思います。

法土寺

今年は我が町の「標識」と「土様」について紹介します。「何を今更？」と首をかしげられる方々もおいでかと存じますが、町民の中でも意外と御存知で無い方が割合い多いと聞きます。その方々を含め再認識して頂く為にも是非紹介したいと思います。

曳山の再出来は文政八年であります。王様は中国三国時代の桃園の三傑、玄徳・関羽・張飛の三者だったが、現代は関羽・張飛の二者です。今の井波町で創られたものと伝えられています。

関羽は三国時代の蜀の武将で字を雲長と申し、有名な赤壁の戦いの後臨川において呉兵に斬られるが後世には民間で大変信仰され、関羽を祀った関帝廟は沢山残っている。

一方張飛は同じく三国時代の蜀漢の武将で、関羽を兄と従い、玄徳と供にその名を三国志の中にとどめる。

又「標識」は軍配にして天下泰平、四海安穏を表わしています。高瀬竹次郎の設計・製作で何時の世でも日本の平和、世界の平和を望む標識だと有難く思っています。前人形の猿は山王神の使者でその舞う姿は非常に愛らしく町内外の人からも可愛がられています。

いずれにしましても剛の武将に護られ、柔の前人形の優しさの頭上に天下泰平の軍配を配した我が法土寺町の曳山は非常にバランスの取れた文化財だと思います。又、今更ながら昔の彫刻師、塗師、金具師等々、当時の職人芸術には只々感心するばかりです。

「いつまでも大事に後世に残し伝えねば……」と、今から十月一日に心を熱くしています。

荒屋町

標識の「千枚分銅」は、金銀を秤のおもりに鋳造し、不時のために備えた財宝を表しています。王様は、五穀豊穣を祈って「大黒さん」等身大の衣装人形で、右手に大きな「打出の小槌」を持っています。

前人形は「唐子の三童子」で、懸垂回転をするからくり人形、俗に「でんぐり返し」と言われています。

現在の曳山は、過去二度の大火を類焼を経て、昭和二十七（一九五二）年、砺波の素封家の大欅で、すべて厚い一枚板で出来ています。制作には木目を生かし、研ぎ出し白木の美しさは、荒屋町曳山独自のものです。

東町

金色の鶏と太鼓が標識の東町曳山車は、十三本ある曳山車の中で一番背が高く又、重量のある山車でもあります。ゆえに昨年は鶏の顔の部分を電線に引っ掛け落としてしまい、恥ずかしい思いをしたものです。曳山祭りを終え、次の富山国体の前夜祭行事に参加することになっていた曳山関係者は一様に曳山車の引き出しが出来ないのでは、と心配したのでありますが、その時、町内のある有志の方の「自分に修理をさせて下さい」との一言で国体の前夜祭参加にも十分間に合、以前にもまして立派な鶏にと、仕上ったのであります。その迅速な修復ぶりは他の町内の人々からも大変な称賛を受けたものです。この様に曳山に対する熱い思い入れと愛着心の強い青年部と役員の心意気が一つとなり実現したものでした。今年、東町曳山は六段の提灯飾りから八段飾りへと、かさ上げの要望を受けて、青年部・執行部役員の一致協力の下、念願の八段提灯枠が、遂に出来上がったのであります。

祭礼当日は装いも新たに、一段と明るくなった東町の豪華な提灯山車を、どうぞじっくりとご堪能していただきたいと思います。

四十物町

毎年九月中旬になるとあちこちの町内で曳山囃子の練習の音色が聞こえ始める。わが町内でも例年九月十五日が練習始めの日である。おそらく古新町さんの曳山が創建された時には、今と全く同じでないにしても、この囃子が完成していたのでしょう。三百五十年の歴史を誇る新湊の曳山もそうですが、その時代時代の技術と文化の粋をつくした壮大な建造物が現存（国宝もふくめて）たくさん残っています。「偉大な先人達は祭り囃子という無形の遺産を利用することによって不動の建造物を動かした」と考えれば、これはなんとすばらしい発見だったのでしょう。建造物に車輪がとりつけられ動きやすいメロディが加わったのです。（曳山とは山をも動かすということか。）本囃子、ちんちこ、お神楽、そして戻り囃子と、巡行の場面場面に合わせて次々と変化するお囃子。本囃子、雑曲を合わせると二十曲程あるそうです。ある時は軽快なリズム、あるときは厳かなムードにあわせて曳山と曳子が一体になり、さらに聴衆もひとつになります。そう思うと、曳山囃子はお祭りを最高潮に持っていく最高の遺産であり、曳山が主役と思っていたのが、見方を変えれば曳山囃子に曳山、曳子、聴衆が踊らされているようにもみえる。

奈呉町

奈呉の曳山の王様は「恵比寿様」、標識は「錫杖」、かたちは「大舟低山」。漁師町らしく舟をモチーフにして作られています。現在、町では漁を営む人は昔に比べずいぶん減りました。

しかし、奈呉の若衆には今でも漁師の威勢の良さが受け継がれ、新湊一の威勢を誇っています。もう一つの自慢は十三本のうちで最も大きく、又重いことでこれが若衆の誇りにもなっています。反面、大きく重いことは曳くのが難しいということにもなります。この重く大きな山を曳くことが奈呉の若衆の祭りに対する意気込みでもあります。

奈呉の山の車が唯一、朱塗装の「板車」であることからも分かるように、金等の装飾を多くあしらった豪華絢爛な車ではありません。

しかし、見るからに重量感溢れズシッとした曳山は、他を寄せ付けない違った美しさをかもし出しています。木の軋む音を出しながら雄大に進み、曲がり角は威勢のいい若衆が担ぎながら曳く曳山、それが奈呉町の特徴です。

今年は標識の「錫杖」を支える帆柱を新調しました。真紅の花山の上にそびえる「奈」の字を象った黄金の錫杖の勇姿を是非御覧下さい。

中町

毎年秋のお祭りが近づいてくると、心が疼き想うことがあります。後何年この神事に携わることが出来るだろうと。生あるものは何れは亡くなるものです。私達は消えることがあっても曳山は消えてはいけません。市の文化財だからとか、観光の目玉だからという短絡的な理由ではありません。三百五十年前より放生津の先人の心がそこに脈々と受け継がれているからです。それはこの地に住む人総ての先祖代々からの心と魂であり、一時期預かっている私達の財産です。しかしこの大事な宝物もそろそろ形をなさなくなる時期がくると思

料亭　能登家
新湊市中央町六－三
☎〇七六六(八四)三〇六二
FAX　(八四)三〇六三

四十物町曳山委員会

お墓の御用命は
石井建材
新湊市中央町九－二五
☎〇七六六(八四)三五一一

菅谷正一土地家屋調査事務所
新湊市善光寺二三二－一〇
電話(代)〇七六六(八二)二九九八
FAX(兼)〇七六六(八四)四六四六

姫野病院
新湊市放生津一五－四
☎〇七六六(八四)〇〇五五

FAMILY RESTAURANT
松木
仕出し・法要・幕の内弁当
レストラン松木
TEL84-8585・FAX82-7077

さがみ代行
☎〇七六六(八四)九八九三
高岡市姫野五七二－二

東町曳山保存会

医療法人社団
矢野神経内科医院
新湊市本町一－十三－一
☎〇七六六(八二)五一五〇(代)

美しいきもの、帯、和装小物
清寿し
新湊市港町10-10
☎0766(84)0151

清水弥呉服店
新湊市港町一七－一〇
☎〇七六六(八二)二五一三

(有)渋谷企画
新湊市作道二四〇－一
☎〇七六六(八四)〇〇三〇

損害保険代理店
（自動車、火災、傷害保険）
富源産業株式会社
☎〇七六六(二一)四五五二

新湊のオンゾハン

新湊市文化財審議会委員
荒木菊男

石仏の代名詞のように使われ、庶民にもっとも親しまれている数多い新湊のオンゾハン（地蔵尊）について、その普及の背景を中心に信仰のおこり等検討したい。

一、地蔵信仰普及の背景

地蔵信仰普及の大きな要因となったと考えられる四つの項目について検討したい。

(一) 自然に対する恐れ

自然に対する恐れとして特に原因となったものに、水難、火災、疫病の三つがあげられる。

(1) 水難　水難は大別して二つある。一つは子供の溺死である。富山湾に面する奈呉の浦は、白砂の海辺で（太平洋戦争後テトラポットで埋まる。）ここは子供達には最良の遊び場であった。また、放生津潟につらなる村々を流れる川や内川は、物資の輸送と射水平野の農業水利にあてられていた。ここは水ぬるむ頃からスズメ貝（シジミ貝）をとったり、鮒を釣り、夏は水に飛び込んだ遊びの広場であった。この裏に、溺死水難の惨事があり親たちは子供の供養に、もの悲しい賽の河原の和讃に登場する地蔵尊をまつり救いを求めた。いま一つは、漁業と海運の町として栄えた中に、海難のケースが多く、そのことが地蔵信仰や観音信仰に結びつく要因となったと考えられる。「板子一枚下地獄」といった命がけの無謀に近い操業もあり海難の記録は各寺院の過去帳に多々見ることができる。八幡町の光山寺前にある二十一人墓と刻む大きな地蔵尊、三日曽根出町の大きな延命地蔵や浜町の地蔵、川端近くの地蔵はこれにかかわるものである。

(2) 火災　新湊では、元録九年（一六九六）三月放生津の大火より、昭和十六年（一九四一）四月古新町・長徳寺の大火まで二四五年間に五十戸以上の火災が実に四十四回もあり約六年に一度はこの火災に遭ったことになる。屋根板葺、木造家屋で経験した悲惨な火災から地蔵信仰への背景が考えられる。東町六角堂地蔵、水難であげた三日曽根出町の延命地蔵などには大火延焼防止に地蔵の活躍が伝えられる。

(3) 疫病　明治十九年、北陸を襲ったコレラは、堀岡でも猛威をふるい、死者続出し火葬場その用に堪えず放生津松原の広場をこれに充てたという。（堀岡村史）、また、作道を中心とするワイル氏病の流行は、大正四年から七年にかけ、作道だけでも五三五名の患者が発生し、うち、一六五名が死亡する大惨事となった。このため作道・海老江・放生津に地蔵菩薩を本地仏とするオコリ（コレラ）の宮という小祠を建てた。また、堀岡東町では疫病塞への菩薩として地蔵尊を祀った。

(二) 宗教的土壌

新湊には、およそ全国平均の三倍に近い神社（約一二〇）寺院（約七〇）があり、真宗王国富山の名は、新湊においても例外ではない。安全祈願は神社で、法要葬儀は寺院と割り切った使い分けがあり、家々には立派な仏壇と神棚が設けられていることが通例のようになっている。これは永い歴史の積み重ねによって培かわれたものであり、地蔵信仰が伝統であり、数多い新湊の地蔵は、この宗教的土壌がなくてはこのように広まり得なかったのではないか。

(三) 海運の発達

新湊には石仏の素材となる石が採れない事実があり、海運の発達なしには殆ど石仏を入手することができなかった。江戸中期に入ると造船技術が発達し、航海術も石黒信由の『算法渡海標的』などの優れた著書も出て急速な発達をした。出津米をてこにして廻船業が栄え、これに付随して行く先々で地蔵を手に入れることが出来るようになった。新湊の石仏に使われている石は、佐渡、能登、越前、瀬戸内から買い求められたものが多い。新湊にも石屋とばれる石材商が後にできているので、石工刻名のない地蔵尊のうちには新湊で造られたものもあろう。とにかくも海運の発達は地蔵信仰普及の重要な背景となった。

(四) 経済の発達

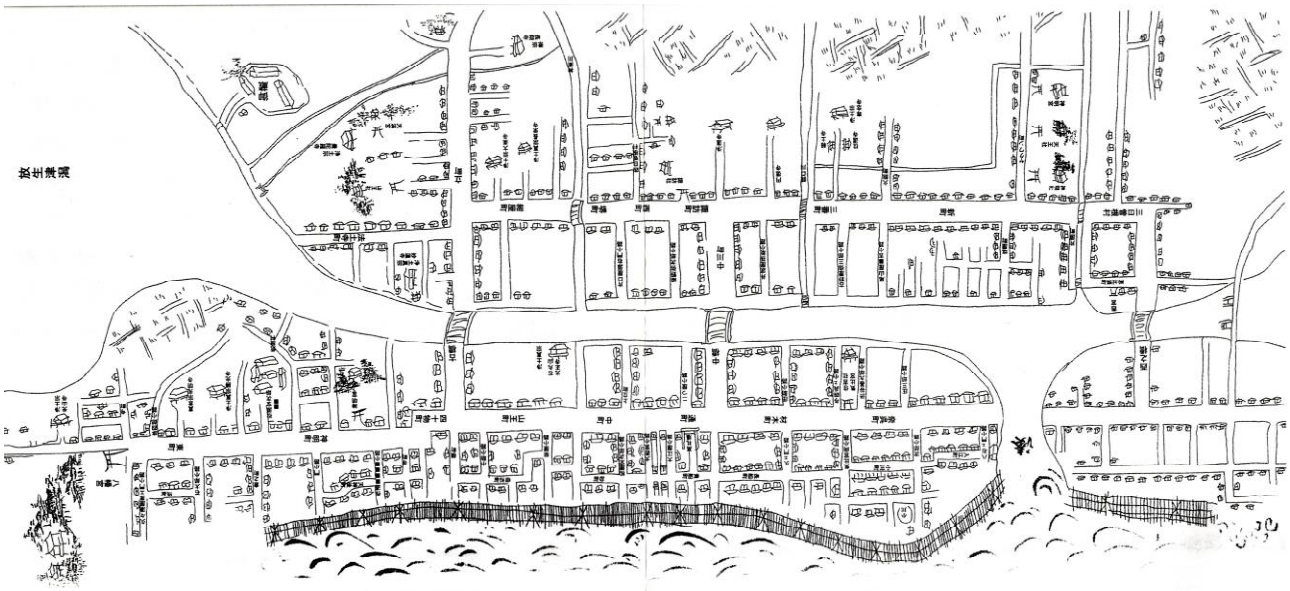
海運の発達と漁業の大漁に恵まれ新湊は経済的に潤うようになる。名物放生津の曳山の再建、改造は、おおむね十七世紀から十八世紀の豊かな海運と漁業の幸に支えられた。この時代こそ、地蔵尊を気軽に求められる財力が備わったと考えたい。

二、地蔵信仰のおこり

江戸の中期、全国的な地蔵信仰ブームの時期に新湊にも地蔵信仰がおきたとされる。江戸期における特徴として極めて民間宗教色の強いことがあげられる。一般に地蔵尊は真言宗や禅宗と縁が深く、それらの寺院に多くまつられている事実をあげている。しかし新湊は、浄土真宗、浄土宗の寺院が約七五%を占めており、寺院と地蔵尊の結びつきは、地蔵まつりに読経をお願いするだけで普段はあまりご縁をもっていまい。つまり、地蔵信仰は宗教とは関係なく、極めて民間宗教色が強く、庶民の素朴な心情から地蔵尊がまつられていると考えられる。

結び

以上新湊の地蔵信仰を観てきた。そして普及要因の多くが人の不幸によるとしたが、今日は、火災件数、疫病件数、水難件数等どれをみても激減している。したがって地蔵信仰の要因は、その意味を失い衰退の大きな原因となっていることは否定できない。しかし子供の交通事故や産児制限といった新しい要因もあり、地蔵尊の役割は終わりをつげず、人々の不幸があるかぎり絶えないのでなかろうか。



Ⅳ）［江］（コウ／え）　について　（新漢和辞典　Ｐ４７６　大修館より）

①川の名　揚子江をいう。

揚子江という名は近世に外国人が四だのに起こった名で、昔は単に「江」または「大江・長江」といった。

②大きな川。ことに中国南地方の大河。

③かわ。河川。入江。　海や湖などの陸地に入り込んでいる所。入江。

Ⅴ）「柱」（チュウ／はしら）　について　（新漢和辞典　Ｐ４３１　大修館より）

①「はしら」　イ　梁、棟木をうけた屋根をささえる材木。

ロ　広く、藻のをささえるものの称。

「天柱、支柱」

ハ　はしらのように直立しているもの。「氷柱」

ニ　中心として他から寄り頼まれるもの。

②「ことじ」　琴の弦をささえ、移動させて音調の高低を生じさせるこま。

③みき。

④さお。

①ささえる。支持する。

②ふさぐ。

③そしる。

④たがう。

以上の調査より、この町の　カンガ用水に利用された「江川」（小川）「直川」を柱にして整地したことに由来する町名であると考えられる。

次回　8/4（水）午後 8:15～　江柱町公民館
太田さん　から　お話しを聞く予定です。　No. 1/4

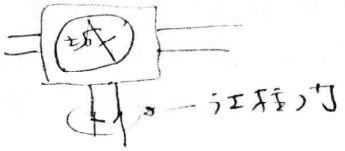
新谷、湊、久々江、吉村、石原、加治、荒木、澤谷、室谷、太田　'93・7・29 伏木

室谷さんの口伝

聞いた人　澤谷、久々江、荒木、伏木
7.29　8:00～10:00

1. 室谷敏夫氏。
・現住所　若葉町（俣野）。　71才。　大正14年生れ。
・立町で生れ、4才で江柱に来た。　澤谷氏と親戚。

2. 江柱町の由来について（新川先生より聞いた）
・明治4年に廃藩置県。明治8年江柱と命名。
・江柱門という名が残っていてそこからきた。
・江柱門は放生津城 惣構門の一つ。二の丸等々同じ。



3. 太鼓を新調した。昭和2年 御大典記念に。

4. 青年団について。（大正時代）
・才1青年団（新湊校下）、才2青年団（放生津校下）、
才3青年団（二の丸校下）の3つがあった。
・江柱は才3青年団に含まれていた。軒数 40～80軒。
・大正8年「江柱青年団」創立した。
団長　草刈正義（旧姓 室谷）氏。
・大正8年～10年までの間、夕日 その他、地町内のセコを集め、
大正10年に獅子を舞いた。

７）舞方は

獅子　　→　林、作道

天狗　　→　林（おじさん）

サンバサ　　→　釣（丸善）

キリコ　　→　林（おっじゃ）　１人で。

８）５月１５日

朝９時　～　夜中　２時まで舞いた。

鎮守の日吉神社で　宮まいりを舞ったが、庚申様では　宮まいり舞はなかった。

９）・太鼓

尺二（しゃくに）の太鼓で　道具持方の子供が棒でかずいた。

・笛方

七軒（法土寺）（桧物のおっさん）に頼んだ。１人。お礼　１円５０銭。

夜中では　年寄りも応援して吹いた。

１０）・町内は９時から１１時まで。　２軒に１つ舞いた。

薙刀かザイゴなど　１つ舞いて、カマで終わった。

・立町　→　紺屋町　→　山王町　→　１２時で昼

・昼ごはんは　各自家へ行き　食べてきた。

１１）獅子舞準備の手伝いは　女子も参加、特に　ご弊を切ってくれた。

１２）獅子舞縁目（えんめ）の種類

薙刀（なぎなた）　鎌（かま）　団扇（うちわ）　獅子殺し（マッチャンダッチするやつ）

１３）獅子の舞き終わりは笛でストップした。

１４）昼　→　新町　　→　三日曽根　出町　　（綿屋彦九郎だんなハン）

（中央町）　　（本町）

→　古新町　→　奈呉　　→　東町

（湊町）　　（放生津町）　（八幡町）

→　荒屋　　→　南立町　　→　晩飯　６時

（八幡町）　　（立町）

→　菊屋町　→　西立町

・舞き方の若連中で飲んだ。

１８）ワラジ。

ワラジ１人で２足。　タビは初年度はなかった。２年目からタビをはいた。

１９）江柱の判

大正８年。記念の判。何に使ったかわからない。（町紋、町印か？）

２０）獅子の口はあけていた。獅子の歯がいたまない様サラシをまいた。

２１）獅子はしゃがんでいた。薙刀、スタコラサッサの掛け声で　立ち上がった。

２２）「獅子は何ですか？」の質問に対し「獅子は　獅子やろがね。」

２４）・キリコは化粧していた。女郎屋へいったら、キリコはかわいがられた。

・当時　女郎屋は３０軒。芸者さんからも祝儀がでた。

２５）＜去年の江柱獅子舞のビデオを見て＞

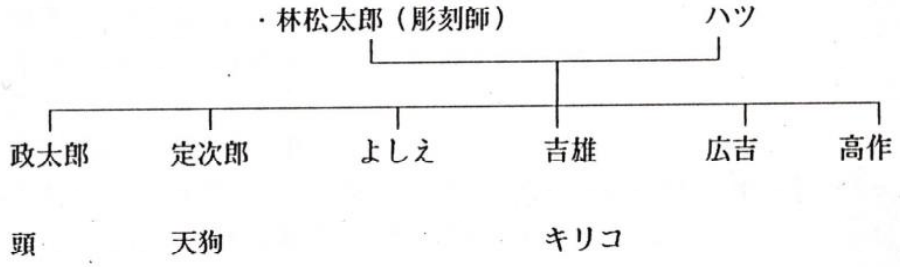
・薙刀　変わっとらんけど　こんなにうまくなかった。

・キリコは変わっていない。　１人でしていた。交替なしだからよく泣いた。

２６）・林政太郎氏について

現住所　　射水郡大門町小泉　　明治３７年８月３日

元　海老の下駄の屋のところに住んでいた。



弟子　２人　→　胴幕

２７）江戸相撲

松太郎氏　２～３才のころ　江戸相撲が江柱に来た。相撲場は、金崎の風呂場